

視点(1285)

下村脩氏(ノーベル賞受賞者)の成果のバトンタッチ論とは!!

2008年のノーベル賞(化学賞)を共同受賞(下村脩氏、マーティン・チャルフィー氏、ロジャー・チェン氏の3学者)した下村脩氏が「私の履歴書」(日本経済新聞社)で、自身の研究成果について述べておられ、私は興味深く拝読しました。

ノーベル賞は研究や行動に「成果」がなければ受賞することができません。博士号は、未知の発見であれば成果がなくても取得できます。

下村氏はオワンクラゲから得た緑色蛍光たんぱく質のGFPの発色団(光が出るための化学構造)を研究し、そのメカニズムを究明しました。下村氏のGFPの研究は1979年には完成し、その時からこの研究から手を引いていました。しかし、29年後の2008年に突如、下村氏はノーベル化学賞を受けました。1979年にGFPのメカニズムを究明した段階では、未知の発見という「0から1」を創り出しましたが、世界中に貢献するという成果はありませんでした。では、なぜ下村氏は成果がなければ受賞できないノーベル賞を授与されたのでしょうか。

そもそも、成果を出すノウハウの思考プロセスがあります(六車流：流通理論)。

第1ステップは「情報」(知るノウハウ)です。情報とは、経験や知識や現象把握から得ることができます。いずれにしても、まず「知ること」から成果のプロセスは始まります。第2ステップは「理論」(体系化するノウハウ)です。理論とは、メカニズムの解明、発想、ノウハウを共有できるように体系化することです。第3ステップは「戦略」(成果を出すノウハウ)です。戦略とは勝ちパターンづくり、数値アップ、参入障壁の高い価値あるエアポケットを見抜くことです。第4ステップは「戦術」(能率良く仕上げるノウハウ)です。戦術とは、より精度高く仕上げる、より速く仕上げる、より廉価に仕上げる、より斬新に仕上げる、より独創的に仕上げることです。第5ステップは「運営」(持続可能にするノウハウ)です。運営とは、長期繁栄させること、精度を常に向上させること、常に世の中の変化に対応することです。

すなわち成果を出すには、上記の5つのノウハウの思考のプロセスが必要です。下村氏がGFPのメカニズムの究明が、具体的に成果に結びついたプロセスは次の通りです。

	思考プロセス		内 容
第1ステップ	情報	知 る こ と	下村氏が光る生物の存在を知り、興味を持ち研究しようとした段階。
第2ステップ	理論	メカニズムを解明すること	1979年に下村氏が「オワンクラゲのGFP」のメカニズムを完成した段階。
第3ステップ	戦略	成 果 を 出 す こ と	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1972年にダグラス・ブラッシャー氏が「GFPのクローン」を創り出した。</li> <li>・1994年にマーティン・チャルフィー氏が「GFPを生きた生物の中で働かせることができることを実証」した。</li> <li>・さらに、ロジャー・チェン氏が「様々な色の蛍光を出すたんぱく質を創り」、生体内のたんぱく質や組織に印を付けるマーカーたんぱく質として広く使われ、医学や生物学の研究で欠かせない存在になった。</li> </ul>
第4ステップ	戦術	効率高く仕上げること	医学界の研究や実際の手術で応用され、医学の技術として精度高いものとして完成した段階。
第5ステップ	運営	持 続 可 能 に す る こ と	現在、医学界で磨きをかけて、技術進歩している段階。

このように、下村氏の理論(成果はないが、物事の現象のメカニズムの究明)は、バトンタッチされ、次々と別の人々によって戦略化(成果のあるものに改良)されていきました。それゆえに2008年のノーベル化学賞は、下村氏とチャルフィー氏とチェン氏の3者が共同で受賞しました。

成果は「単独成果」と「共同成果」と「バトンタッチ成果」の3つのタイプがありますが、結果論ではありますが、オワンクラゲのGFPを医学界の大発展まで高めた成果は、下村氏→マーティン・チャルフィー氏→ロジャー・チェン氏へと受け繋がれた「バトンタッチ成果」です。

(株)ダイナミックマーケティング社<sup>+</sup><sub>4</sub>  
代 表 六 車 秀 之